

令和5年度姫路市大学発まちづくり研究助成事業

留学生・短期交流学生のモニターツアーに
基づく国際誘客の基礎調査

令和6年3月

神戸大学 Promis 地域連携センター

(国際誘客研究グループ)

井上 弘貴

辛島 理人

芹澤 円

留学生・短期交流学生のモニターツアーに基づく国際誘客の基礎調査 目次

第1章 はじめに	1
第1節 姫路市における神戸大学国際文化学研究所のこれまでの取組み	1
第2節 本調査の概要	3
第2章 モニターツアー事例研究（1）——テネシー大学との国際共修プログラム	5
第1節 国際共修プログラムの概要	5
第2節 国際共修プログラムのアンケートの考察	6
第3節 国際共修プログラムの行動観察をつうじて	14
第4節 国際共修プログラムから得られた仮説と課題	15
第3章 モニターツアー事例研究（2）——留学生による姫路ショートトリップ	17
第1節 姫路ショートトリップの概要	17
第2節 留学生とチューターを対象としたアンケートの分析	18
第3節 姫路ショートトリップの考察	23
結論	26
付録（成果発表会での発表スライド）	28

第1章 はじめに

本調査は、神戸大学国際人間科学部ならびに大学院国際文化科学研究科に交換留学生あるいは短期交流学生として在籍する外国籍学生を姫路市に引率するモニターツアーを実施し、アンケートや行動観察をつうじて、国際誘客に関する基礎的データの取得を試みるものである。こうした試みによって、国内外プロモーションの充実と外国人旅行者の誘客について実践的な知見を得ることを目的とする。

第1節 姫路市における神戸大学国際文化科学研究科のこれまでの取り組み

本調査に先立って、姫路市における神戸大学国際文化科学研究科（国際人間科学部）のこれまでの取り組みについてふりかえっておきたい。

姫路で産学共創フィールドスタディを開催しました

2023年02月13日

国際文化科学研究推進インスティテュート（Promis）地域連携センターと国際人間科学部グローバル文化学科が共同で企画し、1月28日に姫路市で「産学共創フィールドスタディ」を行いました。昨年1月に京都府南丹市美山町で行われたセミナーに続いて企画された今回のフィールドスタディには、国際文化科学研究科（国際人間科学部）、地域連携推進本部、SDGs推進本部の教職員と学生約30名が参加するとともに、神姫バス株式会社ならびに地元姫路のDMOである公益社団法人姫路観光コンベンションビューローから8名の関係者の皆様にご参加いただきました。当日は、ビューローの職員の方の先導のもと、柱屋などの銘菓が揃うピオレ姫路おみやげ館や小磯良平の原画が並ぶホテルモンテレ姫路などの姫路駅前施設や商店街のまち歩きをしました。



午後からは姫路市市民会館に場所を移し、日本の内外の若者に姫路の魅力をアピールするための情報発信についての提案を中心に、姫路の観光振興について学生たちがプレゼンを行い、神姫バスの社員の方々やビューローの方々と質疑や意見交換を行いました。また、本学卒業生でもある神姫バス社員の方には、神姫バスの地域づくりの取り組みについて、ミニレクチャーをいただきました。国際文化科学研究科は3月に姫路市と地域連携協定（部局協定）を締結するだけでなく、海外協定校からの

留学生を交えた教育研究活動の可能性を神姫バスと引き続き検討するなど、今後も観光まちづくりを主題とした異分野共創の研究教育や社会実装を展開していく予定です。

図1 2023年1月28日実施の産学共創フィールドスタディの広報記事(2月13日付)

https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2023_02_13_01.html

神戸大学国際人間科学部では、新型コロナによる感染拡大防止の措置が緩和され、それまで2年間にわたって大幅な制限を受けていた交換留学が再開された2022年度に、交換留学生にたいする各種の歓迎行事を再開した。コロナ以前から、交換留学生と、国際人間科学部の学部生のなかから選抜される交換留学生チューターによる日帰り研修を秋に実施していた同学部では、2022年度の日帰り研修の再開に際して、新たな行き先を姫路市として、2022年10月22日(土曜日)「姫路ショートトリップ」を行なった。留学生、チューター、引率教職員合わせて67名が参加し、書写山圓教寺を訪れた¹。

神戸大学大学院国際文化学研究科が姫路市と地域連携協定を締結

2023年03月28日

神戸大学大学院国際文化学研究科は2023年3月22日、姫路市と地域連携に関する協定(部局協定)を結び、姫路市役所で協定締結式を行いました。同研究科が兵庫県内自治体と連携協定を締結するのは南あわじ市に次いで2力所目、神戸大学が中・播磨地域の自治体と連携協定を結ぶのは初めてとなります。

国際文化学研究科では2022年4月に地域連携センターを設置し、地域での教育、研究活動や貢献事業に取り組んでいます。その一環として、昨年秋ごろから井上弘貴教授、辛島理人准教授を中心に、姫路市内で観光まちづくりをテーマに研究、教育活動を進めています。昨年10月末には、ドイツや中国などの留学生ら約60人が参加して「姫路ショートトリップ」を実施し、世界遺産・国宝姫路城や書写山円教寺を見学するなど日本の歴史、文化を学びました。また、今年1月末には、神姫バス、姫路観光コンベンションビューローとともに「産学共創フィールドスタディ」を実施し、姫路市中心部を巡って、地域の歴史文化を学ぶとともにインバウンド観光の課題などを探りました。

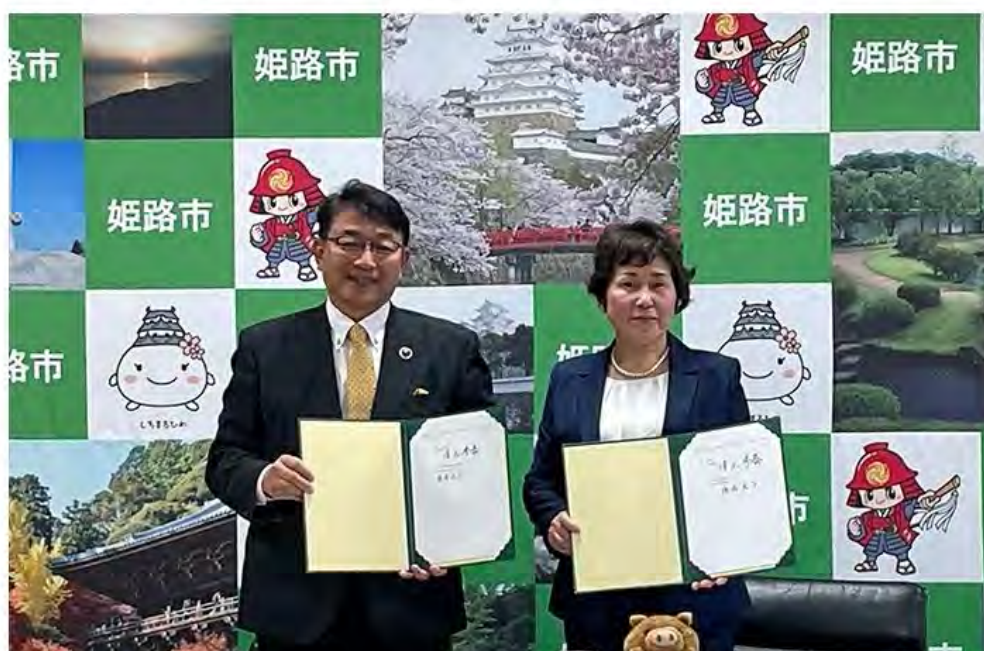


図2 2023年3月22日に締結された地域連携協定に関する広報記事(3月28日付)

https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2023_03_28_01.html

¹ 交換留学生と学生チューターが、姫路市の書写山・圓教寺で交流を深めました

https://www.fgh.kobe-u.ac.jp/ja/z/news_and_event/2022-11-02-505

この2022年度の姫路ショートトリップを踏まえ、同学部グローバル文化学科と、大学院国際文化学研究科附属の研究プラットフォームである国際文化学研究推進インスティテュート（Promis）の地域連携センターが共同で、図1のように、2023年1月28日（土曜日）に産学共創フィールドスタディを実施した。学部生、大学院生ならびに神戸大学の教職員30名が参加して、姫路駅前の各種施設見学を含め、まち歩きを行なったうえで、同学科の井上弘貴教員のゼミ生たちが姫路市市民会館にて、日本の内外の若者に姫路の魅力をアピールするための提案を、パワーポイントを用いて発表した。この発表の特徴は、学生たちが自分たちの経験に基づいてSNSと連動したショート動画の有効性を強調した点にあった。このショート動画の有効性については、本報告の第3章であらためて考察する。

学生たちによる発表後、公益社団法人姫路観光コンベンションビューローならびに神姫バス株式会社の関係者を交え、参加者一同で意見交換を行なった。また、神姫バス株式会社の若手社員も当社が取り組んでいる地域連携の諸事業について発表を行なった。この産学共創フィールドスタディをつうじて、Promis 地域連携センターとして、姫路市をフィールドとした国内外からの当地へのさらなる誘客について研究を進める必要について認識を深めた。

2022年度における以上のような一連の活動を経て、2023年3月22日、図2のように姫路市と国際文化学研究科は地域連携協定を締結するに至り、同研究科は姫路市をフィールドとして、国際交流、産業振興、観光の諸点について研究教育を推進していく態勢を整えた。これを踏まえ、Promis 地域連携センターのなかに国際誘客研究グループを組織し、今後の本格的な研究ならびに社会実装の前段階として、交換留学生及び短期交流学生を対象とした姫路市でのモニターツアー実施をつうじて、国際誘客に関する基礎的データの取得と分析、さらには考察を行なうことを計画した。

第2節 本調査の概要

2023年度、姫路市でのモニターツアーとして、2回の日帰り教育旅行（ショートトリップ）の実施を計画した。第1回は、米国テネシー州のテネシー大学ノックスヴィル校からの短期交流学生と、このテネシー大学からの学生と交流する国際人間科学部の日本側学部生（外国籍学生を含む）を引率し、5月27日（土曜日）に実施を計画した。

5月20日から6月1日にかけて、テネシー大学ノックスヴィル校から、神戸大学国際人間科学部においてサマープログラムを実施する米国人学生14名、引率教員1名、大学院生の引率補助者1名が来学した。国際人間科学側では、学部におけるGSP（グローバル・スタディーズ・プログラム）の国際共修プログラム（実践型国内研修）として参加を募った学部学生14名が参加した。5月27日のショートトリップでは、テネシー大学側は全員が参加。神戸大学側はプログラム参加学生のうち2名が欠席した。午前中に姫路城を訪れ、グループに分かれての昼食後、午後は書写山を訪れた。

第2回は、10月14日（土曜日）実施した。国際人間科学部に半期あるいは1年の期間で

在籍する交換留学生と、その交換留学生たちをサポートする交換留学生チューターを対象としたショートトリップの形態をとっておこなった。留学生 44 名、学生チューター 22 名の計 66 名が参加した。旅程は 5 月の催行の際と同じである。

本成果報告書では以下、この 2 回のショートトリップの事例研究のかたちをとり、分析と考察を行なう。

第2章 モニターツアー事例研究 (1) ——テネシー大学との国際共修プログラム

第1節 国際共修プログラムの概要

5月27日に姫路市で実施したモニターツアーについて分析と考察をおこなう前に、このモニターツアーを含むテネシー大学との国際共修プログラムの概要について触れておきたい。

テネシー大学と国際共修プログラムを実施しました

2023年06月12日

国際人間科学部ならびに国際文化学研究科では5月20日から6月1日、神戸大学と大学間協定を締結しているテネシー大学ノックスヴィル校の学生たちを迎え、国際共修プログラムを実施しました。この国際共修プログラムは、テネシー大学の堀口典子准教授が企画した同大学のサマープログラムとの共同催行のかたちで、国際人間科学部のGSP実践型「テネシー大学の学生と国際共修で学ぶ：Tennessee Friendship Program」としておこなわれました。

このたびの国際共修プログラムでは、20日初日のウェルカム・ミーティングに続き、小グループにわかれての三宮でのまち歩きにより交流を深めたあと、テネシー大学の14名の学生と国際人間科学部の14名の学生がペアを組み、「日本のポップカルチャー」を共通テーマとして、英語でプレゼンテーションをするための共同作業を期間中におこない、5月31日と6月1日の2日にわけて発表会をおこないました。6月1日の最終日には、テネシー大学のクリスタ・ウィーガンド教授が引率し、法学部を訪れた11名の別のテネシー大学の学生たちも合流参加しました。



期間中、テネシー大学の学生たちは堀口准教授の引率のもと、京都、大阪、姫路、奈良などを訪れました。姫路については5月27日、国際文化学研究科のPromis地域連携センターの協力のもと、神戸大学側の学生もプログラムの一環として参加し、姫路城や書写山園教寺をともに訪れ、日本の文化がアメリカ人の学生たちにどのように受けとめられているのかを実地で体験する機会となりました。

テネシー大学との共同プログラムは2019年に試行したあと、新型コロナウイルスの世界的な拡大のなかで中断を余儀なくされていました。このたびのプログラム再開をきっかけとして、国際人間科学部ならびに国際文化学研究科では、学内外との連携をはかりつつ、研究と教育のさまざまな場面でテネシー大学との交流を今後とも強化していく予定です。

図3 テネシー大学との国際共修に関する広報記事(6月12日付)

https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2023_06_12_01.html

神戸大学は、米国テネシー州の州立大学であるテネシー大学ノックスヴィル校と2000年代から学術交流協定を締結して、各種の交流を継続してきた。2019年にはテネシー大学の教員引率のもとで10名の学生が訪れ、神戸大学国際人間科学部の学生と交流を行なった。

この交流は新型コロナの世界的な感染拡大によって一時的な中断を余儀なくされたものの、2023年度に再開され、2023年5月20日から6月1日にかけて、テネシー大学から14名の学生、ならびにティーチングアシスタントと引率教員各1名が神戸大学国際人間科学部にサマープログラムを実施した。

神戸大学側においては、国際人間科学部が必修としているグローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）の一環として参加学生を募集し、応募者のなかから14名の学生を選抜した。テネシー大学と神戸大学の参加学生たちはペアを組み、「日本のポップカルチャー」を共通テーマとして、英語でプレゼンテーションをするための準備に取り組み、プログラムの終盤の2日間にわけて発表会をおこなった。また、プログラム期間中にテネシー大学の学生たちと、国際人間科学部グローバル文化学科教員の井上弘貴が開講した演習の履修者による交流も持ち、図4のように日米における文化の違いに関するさまざまなケースに即して、英語による討論をおこなった。



図4 テネシー大学の学生との教室での国際共修の様子(2023年5月25日実施)

以上のような国際共修プログラムの一部として、5月27日（土曜日）、姫路市において日帰りのショートトリップを実施した。Promis 地域連携センター国際誘客研究グループは、このショートトリップをモニターツアーとして捉えた。

第2節 国際共修プログラムのアンケートの考察

テネシー大学との国際共修プログラムの一部としてのショートトリップでは、午前中に姫路城を訪れ、グループに分かれての昼食後、午後は書写山を訪れるというルートを採用した。テネシー大学側は、14名の学生、ならびにティーチングアシスタントと引率教員各1名の合計16名全員が参加した。神戸大学側は、GSPとしての参加学生14名のうち2名が欠席し、引率教員は井上弘貴と辛島理人の2名の合計14名が参加した。

ショートトリップ終了時には、テネシー大学の学生を対象として 4 つの自由記述から成る参加アンケートを実施し、14 名のうち 13 名から回答を得た。また、テネシー大学の学生たちにたいするアンケートだけでなく、ショートトリップを含めた国際共修プログラム全体を催行する立場にある井上は、エスノグラフィー（行動観察）に立脚したモニターツアーの観察をおこなった。アンケート及び行動観察から浮かび上がった点は下記の 3 点に集約される。



図 5 帯同いただいた神姫バス社員のかたから説明を受ける参加者(6 月 12 日付)

- ・テネシー大学の学生たちは、時には快適ではない経験もしたがそれはアンケート等にははっきりとは書かれなかった。
- ・テネシー大学の学生たちの日本語の運用能力と日本についての知識とのあいだには非常に大きなギャップがあった。
- ・アメリカ側の引率教員は引率時にさまざまなリスクを感じていた。

本節ではまず、アンケートについて考察する。以下はテネシー大学の参加学生 14 名のうち 13 名から回答を得た参加者アンケートの結果である。◆を冒頭に付しているのが、質問項目であり、全部で 4 つの質問をおこない、回答は自由記述方式で求めた。質問番号のうしろのアルファベットは同一の参加学生に割り振っている。つまり、たとえば 1-a、2-a、3-a、

4-a の自由記述の回答は、同一の学生のものであり、その他のアルファベットについても同様である。

◆ (1) What kind of impression did you have about Himeji? (あなたは姫路についてどのような印象をもちましたか。)

• (1-a) I love Himeji! As an architecture major, it was very fun to be able to experience it in person. It was so interesting to learn about all the defense mechanisms that they have too.

• (1-b) The views looking out from the castle were really beautiful. The architecture and structure behind the castle was amazing and I would have loved to witness a Kabuki performance if I visit again in the future.

• (1-c) It was beautiful, I rarely see castles with this tips of architecture. The beautiful white and black exterior is eye catching.

• (1-d) Very pretty! There's nothing like back in the U.S. Nothing like this oldies culture.

• (1-e) It was very well kept and clean. The old architecture was very pretty and I loved walking inside.

• (1-f) So pretty! The view is amazing! I really enjoyed learning more about Himeji and its history.

• (1-g) Very large, very old.

• (1-h) I immediately I was taken by the nature.

• (1-i) I thought the castle was interesting. It was amazing to see the views and architecture. I thought it was very majestic.

• (1-j) I thought it was beautiful and very different from anything else we have been to.

• (1-k) That it was very old and has a rich history. That more people should know about.

• (1-l) It was impressive and beautiful. I loved experiencing the history first hand.

• (1-m) The architecture was amazing! The amount of detail and effort put into the roof and ceiling

was outstanding. I also enjoyed the layout and garden. It was a good castle and my favorite part was the view from the top.

◆ (2) When visiting Himeji Castle, did you experience any inconveniences as an overseas traveler?
(姫路城を見学した際に、海外からの旅行者として何か不便を感じた点はありましたか。)

- (2-a) Not really. The only thing was the steep stair. They were very hard to climb up on.

- (2-b) Not specifically apart from the interior being overcrowded, but apart from the steep stairs and the crowd, the views were beautiful.

- (2-c) No, I did not see any or experience, inconvenience.

- (2-d) Not particularly. I was already aware I would take off my shoes. The stairs were really steep, but I bet domestic citizens also had troubles.

- (2-e) Everyone was friendly and there are English translations for those who do not know English.

- (2-f) I can't read the signs, but other than that none.

- (2-g) I was a little nervous going down the steep stairs in the castle.

- (2-h) No inconveniences, it was beautiful.

- (2-i) No, I thought the steps were crazy but otherwise it was fine.

- (2-j) I couldn't read the signs.

- (2-k) No

- (2-l) No

- (2-m) No, not really. The only issue was how small and steep the stairs were as I didn't want to fall on anyone.

◆ (3) When visiting Engyoji Temple, did you experience any inconveniences as an overseas traveler?
(書写山圓教寺を見学した際に、海外からの旅行者として何か不便を感じた点はありまし

たか。

• (3-a) The walk was very interesting and long. I normally am not someone who climbs/hikes but it was okay.

• (3-b) Not particularly since we were in a big group.

• (3-c) No, I did not experience any inconvenience, maybe taking shoes off.

• (3-d) No culture shock did I experience.

• (3-e) No inconvenience, just a lot of walking and climbing!

• (3-f) Can't read the signs.

• (3-g) No, I'm just out of shape.

• (3-h) Not single one.

• (3-i) Nope, it was really beautiful. There was an issue with a water but that's not a fault of Engyoji.

• (3-j) There weren't as many signs and we got a little lost while trying to get back.

• (3-k) No.

• (3-l) I wish I know more clearly where I was on the map.

• (3-m) No, not as an overseas travelers. I was unprepared for the hike as I didn't realize it was on a hill mountain.

◆ (4) What efforts do you think should be made to increase the number of tourists from the United States to Himeji? (アメリカから姫路に来る旅行者を増やすためにはどのような努力をしたら良いとあなたは思いますか。)

• (4-a) I think that it would really just be more about the person learning more about it.

• (4-b) Maybe have more English speaking town guides who could explain the history and importance of the architecture. Walking up, there were many Kanji characters and attractions I did not understand.

- (4-c) The public education system should incorporate more information about Japanese culture in the curriculum, also start running ads in TV.
- (4-d) I might say that emphasizing some of the natural beauty and traits might help. The wonderful nature and foliage might attract people.
- (4-e) There should be more people able to speak English, but we should also make efforts to learn more Japanese. A tour is a must so we know what we are doing.
- (4-f) I think if it was advertised on social media that it would attract more US visitors.
- (4-g) advertise how old everting is or use social media and influencers to make videos about Himeji on You Tube, and Tik Tok.
- (4-h) More overseas advertisement.
- (4-i) Possibly offer other ways to make it to the top other than walking.
- (4-j) Advertised on social media till increase the visitors.
- (4-k) Try to make ads to help drive tourists to the place of interest.
- (4-l) Increase the amount of advertising for these landmarks.
- (4-m) I think the U.S.A. needs to show a greater interest in other cultures. If we include more Asian studies in primary, middle and high school I believe more people will become interested in visiting and learning about Japanese cultural history.

以上の回答からまずうかがえることは、回答をした 13 名全員が、姫路について肯定的な感想を寄せているということである。国際共修プログラムの一部として実施されたショートトリップは、テネシー大学に在籍する学生たちにとって十分満足のいく小旅行となったことが、確認できる結果となった。

そのうえで、2つ目と3つ目の質問では、姫路城と書写山の双方で、何か不便を感じる経験をしたかという質問をおこなった。このふたつの質問の回答からわかることは、テネシー大学の参加学生たちは、時には快適ではない経験もしたが、それはアンケート等にははつき

りとは書かれず、書かれた場合も大半の場合、和らげられた表現で回答しているということである。

図6は、1-a、2-aの回答について、実際の回答用紙の様子である。1-aを日本語にすれば「姫路が好きです。建築の専攻として、対面で体験できたことはとても楽しかったです。お城の防御の仕組みについて（見学をつうじて）学ぶことは非常に興味深かったです」ということである。このようにテネシー大学の参加学生aは、みずからの専攻の観点から、姫路城から気づきや示唆を得られたことがうかがえる。専攻との結びきが仮になくとも、テネシー大学の参加学生たちは、「美しい (beautiful)」や「すてき (pretty)」という形容詞をたとえば用いて、姫路あるいは姫路城について肯定的に言及している。

他方で、姫路城の見学の際に、海外からの旅行者として何か不便を感じたかを問う質問の回答である2-aは、1-aとは異なるトーンで書かれている。テネシー大学の参加学生aは、

UT Kobe Summer Program 2023
Survey for short trip at Himeji

Please answer the following questionnaire. Thank you for your cooperation!

◆What kind of impression did you have about Himeji?

I LOVE HIMEJI! As an **姫路についてどのような印象をもちましたか?**
姫路が好きです! be able to experience it in
interesting to learn about all the
defense mechanisms that they have too

姫路城を訪れた際、海外からの旅行者としてなにか不便を感じましたか?

◆When visiting Himeji Castle, did you experience any inconveniences as an overseas traveler?

Not really. The only thing was the steep stairs,
they were very hard to climb up on

そういうことはなかったです。ひとつだけ、階段がきつかったです。上るのがとてもきつかったです。

図6 テネシー大学の参加学生によるアンケート回答の例

姫路城の階段の勾配がきついことについて回答し、この点に不便を感じたことを明らかにしている。ただし、2-aの冒頭は「そういうことはなかった (not really)」という書き出しで始まっており、仮に「はい」か「いいえ」の2択で回答を求めたならば、「いいえ」と回答した可能性があると推定される。自由記述を求めたがゆえに、この学生は、不便を感じることはなかったとあくまでも前置きをしたうえで、強いて言えば、お城の内部の階段が急であったという論じ方をしている。このように、みずからの否定的な意見は、付記というかたちで書かれてはいる。とは言え、あがるのが「とてもきつい (very hard)」という表現からも、この参加学生が感じた不便さは、けっして小さいわけではなかったことは十分に推測できる

ところでもある。

この2-aのように、回答の全体的なトーンは、不便さの有無について「いいえ」に相当するが、実際には不便さを感じたことが記されている回答は、(2)と(3)のそれぞれについて複数、見出すことができる。(2)については、aをはじめ、b、d、f、i、mの6名が「いいえ」に相当する回答を一見しているものの、実際には感じた不便さに言及している。「案内表示を読むことができなかった」と明確に不便さを表明している2-jのような回答はむしろ少数である。2-gは「お城の急な階段を降りるのは、すこし不安だった」と記述しており、不便さの有無について「はい」に相当する回答をしている。ただ、この2-gは「すこし不安(a little nervous)」という表現をしており、抑制的な書き方がとられていることは注目しておく必要があるだろう。

書写山圓教寺の見学に際して、海外からの旅行者として何か不便を感じたかを尋ねる(3)については、案内表示が読めなかったことを書いている3-fの回答や、自分が地図上のどこにいるのかがもっとはっきりとわかれば良かったということを指摘する3-lの回答のように、明確に不便さを回答した者は、2名と少数にとどまっている。しかし、(2)と同様に、不便さの有無について「いいえ」に相当する回答を一見してしている一方で、実際には不便さを感じたことが記されている回答は、a、c、e、g、i、mの6件が確認できる。これらの意見は、靴を脱がなければならなかった点に触れている3-c、あるいは給水の点で不便な経験があったことを回答している3-iをのぞけば、すべて書写山の山道の長さや陰しさについて記述している。

たとえば、3-gは文脈から山道の大変さを論じたものであると思われるが、「いいえ、自分の体調が悪かっただけです」と、責任はあくまでも自分の側にあるという書き方をしている。3-mもまた、ハイキングについての自分の備えが十分ではなかったということであって、海外からの旅行者としての不便があったわけではないという意味づけをおこなっている。とはいえ、3-gにしても3-mにしても、山道がきつかったことは事実として触れられているところである。総じて(3)の質問については、一見して肯定的な書き方がなされているものの、バスではなく山道を使用したショートトリップの行程が、車社会であるアメリカ南部からやって来た学生にとっては、とりわけ不便さとして受けとめられうるきついものであったことがわかる²。

いずれにしても、(2)と(3)の質問から、仮に不便さの有無について「はい」か「いいえ」で質問したならば、「いいえ」に相当すると思われるものの、実際には感じた不便さを書いている回答は、それぞれについて13名のうちで6名であり、過半数を越えてはいないとはいえ、ほぼ半数を占めていることが読みとれる結果となった。

異文化マネジメントの専門家として知られるエリン・メイヤーは、日本でも翻訳のある

² なお、健康上の配慮の必要がある参加者(神戸大学国際人間科学部の学生1名)については、徒歩ではなくバスで圓教寺への行き帰りをおこなった。

『異文化理解力』のなかで、アメリカ人は「ネガティブなメッセージをポジティブなメッセージで包み込むように訓練されている」ことを指摘している³。すなわちメイヤーにしたがえば、否定的な事柄を言わなければならない場合に一言して肯定的な意見のように言うのは、アメリカ人の文化的傾向性であるということになる。

メイヤーの知見は、テネシー大学との国際共修プログラムの一部としてのショートトリップのアンケート結果の考察と合致するものである。このことを本節ではひとまず確認しておくことにする。

第3節 国際共修プログラムの行動観察をつうじて

ショートトリップに限らず、テネシー大学との国際共修プログラム全体を行動観察することで確認できた点について、本節では手短ながらも述べておきたい。

まず国際共修プログラム全体を行動観察することで確認できたことは、テネシー大学の参加学生たちの日本語の運用能力と日本についての知識とのあいだには非常に大きなギャップがあったということである。ひと言で言えば、日本語が話せないということは、日本について知らないということの意味しないということであり、前者と後者は結びつけて考えることはできないということである。今日、とくにサブカルチャーの分野を中心に、英語で流通している日本についての情報は膨大なものがあり、それらの知識はリアルタイムに更新されている。現在では、仮に日本語の運用能力が十分ではない、あるいはまったくない場合でも、かなりのところまでアニメ、まんが、音楽などのサブカルチャーについての情報や知識に英語でアクセスすることができ、それによって分野によっては自分自身の知見をかなりのところまで体系的に蓄積することが可能になっている。

本章の第1節で述べたように、テネシー大学との国際共修プログラムでは、「日本のポップカルチャー」を共通テーマとして、英語でプレゼンテーションをするために、テネシー大学の参加学生と神戸大学国際人間科学部の参加学生とが準備に取り組み、プログラムの終盤の2日間にわけて発表会をおこなった。7組が報告をおこなったが、すべてのペアについて、テネシー大学の参加学生と神戸大学国際人間科学部の参加学生とが対等な役割をもってプレゼンをおこなうか、あるいはテネシー大学の参加学生が主導して、神戸大学国際人間科学部の参加学生とプレゼンをおこなうかのどちらかであった。神戸大学国際人間科学部の参加学生が主導するケースはなかった。

もちろんこれは、プレゼンテーションでの報告のための言語が英語であるため、英語の母語話者であるテネシー大学の参加学生が有利であることに主として起因しているものと推測することができる。ただし、仮にそうであるとしても、ポップカルチャーというテーマに関する知識や情報は、プレゼンテーションに支障をきたさないほど、英語に翻訳されているということの意味してもいる。このことが暗示しているのは、英語のみで構築された日本の

³ エリン・メイヤー、田岡恵監修、樋口武志訳『異文化理解力』（英治出版、2015年）、89頁。

カルチャーについての意味世界が存在しているということである。この点については、次章でさらに考察を続けることにする。

ショートトリップに限って行動観察から確認できた点もある。それは、テネシー大学の引率教員はショートトリップの引率時、独自のリスクを感じていたということである。この点をもっとも垣間見られたのは、姫路城内の急な階段の上り下りの場面だった。テネシー大学の引率教員は、テネシー大学の参加学生たちが安全に階段の上り下りができているか、注意を払って見守っていた。当該の引率教員の話によれば、テネシー大学では過去に、ヨーロッパで実施したプログラムで、足の痛みを訴えた参加学生がその後に亡くなるということが起き、訴訟に発展したケースが起きている。このたびのテネシー大学との国際共修プログラムにおいて、テネシー大学の参加学生のなかには体重等の面で、姫路城内の急な階段の上り下りに潜在的なリスクを抱えている者がいたため、テネシー大学の引率教員の懸念は、十分に根拠のあることだと思われた。

前節で触れたように 2-a をはじめとした実際には不便さを感じたことが記されている回答、2-g のように抑制的な筆致ながらも階段が急であることを明確に回答している者がいたように、姫路城内の急な階段の上り下りについてテネシー大学の学生たちは意識をしていた。万が一、仮に城内の階段に関連して何らかの事故等が生じれば、今回について事前の注意喚起をおこなってはいなかったため、テネシー大学のみならず神戸大学も、潜在的にはリスクを負っていた可能性はある。したがって、プログラム催行におけるこうした潜在的なリスクを把握するうえでも、不便さの有無について「いいえ」に相当するが、実際には不便さを感じたことが記されている回答は、重要性を有していると言わなければならない。

第4節 国際共修プログラムから得られた仮説と課題

以上のように、本章では 2023 年 5 月下旬から 6 月はじめにかけて実施されたテネシー大学と神戸大学国際人間科学部との国際共修プログラム、ならびにこのプログラムの一部として催行された姫路市でのショートトリップの考察を、テネシー大学の参加学生にたいするアンケートとプログラムの行動観察に基づいておこなった。なお、アンケートのうちでアメリカから姫路に来る旅行者を増やすためにはどのような努力をしたら良いかを質問した (4) については、本章では考察を加えていない。この質問については、次章の考察のなかで部分的に触れたい。

とりわけショートトリップの考察から明らかになったことは、表現を変えつつ繰り返すなら、テネシー大学の参加学生たちは、時には不便な経験もしたが、それはアンケートには必ずしも否定的には書かれず、肯定的なメッセージを維持する表現で回答する傾向があるということだった。アメリカ人のこのような文化的傾向は、エリン・メイヤーのような近年の著名な研究者によってもすでに指摘されているところであり、本調査はそれを再確認するかたちとなった。

ただし、ひとつ仮説的に生じる問いは、不便な経験を否定的には表現せず、抑制的に示す

傾向は、日本においても見られることであり、もちろんアメリカの場合は、肯定的なトーンが非常に明快に出る場合があるとはいえ、必ずしもアメリカに固有の傾向ではないのではないか、ということである。この点については、アメリカ以外の国からの学生をつうじてさらに考察をする必要がある。

また、アンケートの結果と行動観察とを結びつけるなら、肯定的なメッセージの背後に隠れている否定的な経験をどのように表出させることができるのかは、課題として浮かび上がってくる点である。本章で扱った国際共修プログラムでのショートトリップの場合は、参加人数は限られており、自由記述のアンケートによって参加者の声を丁寧に拾い上げることが可能だった。しかし、参加者の規模がより大きくなった場合や、自由記述のアンケートに細かく答えてもらう時間が確保できない場合、アンケートの設計の仕方に工夫が求められるところでもある。

以上の仮説と課題を踏まえて次章では、2023年10月に催行した留学生による姫路ショートトリップについて検討をくわえる。

第3章 モニターツアー事例研究 (2) ——留学生による姫路ショートトリップ

第1節 姫路ショートトリップの概要

2023年10月14日土曜日、神戸大学国際人間科学部では、交換留学生を引率しての第2回となるモニターツアーを姫路市で実施した。



図7 交換留学生とチューターによる姫路ショートトリップの様子

神戸大学国際人間科学部では毎年、前期と後期のそれぞれのタイミングで、協定を締結している協定校から交換留学生を受け入れている。第1章で述べたように、交換留学生と、国際人間科学部の学部生のなかから選抜される交換留学生チューターによる日帰り研修を2022年度から再開し、2022年10月に姫路ショートトリップを催行した。2023年10月の姫路ショートトリップは、同学部の留学生歓迎行事としては通算で第2回となるものであり、本調査のモニターツアーとしても第2回となるものだった。この留学生による姫路ショートトリップとしての第2回モニターツアーは、第1回と同じ行程で実施した。

図7のように、第2回モニターツアーとしてのショートトリップは、交換留学生44名、チューター22名、引率教員2名(井上弘貴、芹澤円)の合計68名が参加した。ショートトリップ実施後、留学生とチューターのそれぞれにたいして google フォームを使用してアン

ケートを実施し、11 か国、31 名の留学生からアンケートを回収（回答率 70%）した。チューターからは、22 名のうち 13 名から回答があった。後述のとおり、留学生とチューターにはそれぞれ異なる質問項目のアンケートを実施した。

第 2 節 留学生とチューターを対象としたアンケートの分析

図 8 は、あなたは日本に来る前に姫路を知っていましたかという質問にたいする留学生の回答状況である。「はい」と答えた留学生は、54.8%であり、回答した全留学生のなかでの姫路の事前の知名度は 5 割をわずかに上回った。それなりの認知度とも言えるが、日本にあらかじめ関心のある留学生たちであることに鑑みれば、認知度向上の余地はさらにあると言える。

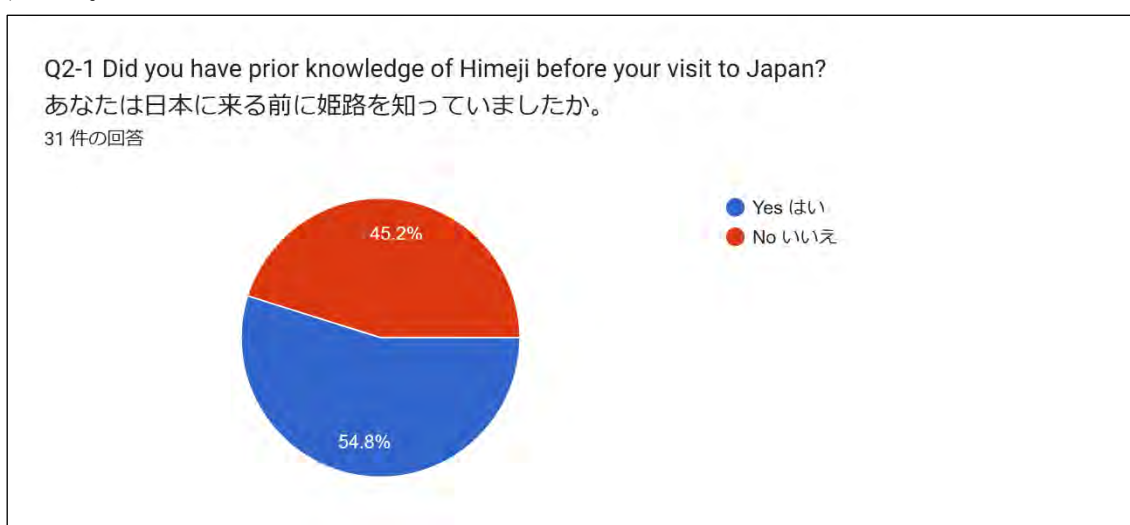


図 8 留学生のなかでの姫路の事前の認知度

さらに「はい」と回答した留学生にたいしては、どのように事前に姫路のことを知ったのかについて、自由記述による回答を求めた。回答は以下のとおりである。

- Tiktok
- James Bond の映画
- フランスの日本の文化の授業に姫路城のことを聞いた
- 旅行
- 初めての留学で見に行きました。
- From documentaries and before visiting Japan I did some research of what sights I would like to see
- ネットで読みました。何年か前ですからどこで読んだのかはもう覚えていません。
- Internet
- I like history so found out about the castle.
- 関西、また兵庫を調べた時には、姫路についても知るようになり、歴史が詳しい友人からも姫路城についても聞いたことがあります。

- ・ 友達が日本に旅行した時姫路城を勧めました
- ・ Heard of it via youtube videos on japanese culture and it's a famous place. I also wanted to visit famous landmarks in Japan, and searching for it on internet Himeji came pretty often.
- ・ Online tourist guides
- ・ at University
- ・ general knowledge, my research
- ・ From general knowledge and school

以上の回答から、姫路について知った機会は多岐にわたることがうかがえる。なかには、姫路ロケがおこなわれ、ショーン・コネリーがジェームズ・ボンド役として主演した『007は二度死ぬ』（1967年公開）を挙げた留学生もいた。007シリーズの根強いファンは特定の世代によらないとはいえ、もちろんこうした姫路との出会いは、相対的にはまれなケースであると言える。自由記述からは、学校教育をつうじて知ったという回答が複数見受けられた。また、ネットから知識を得たという複数の回答を確認できる。

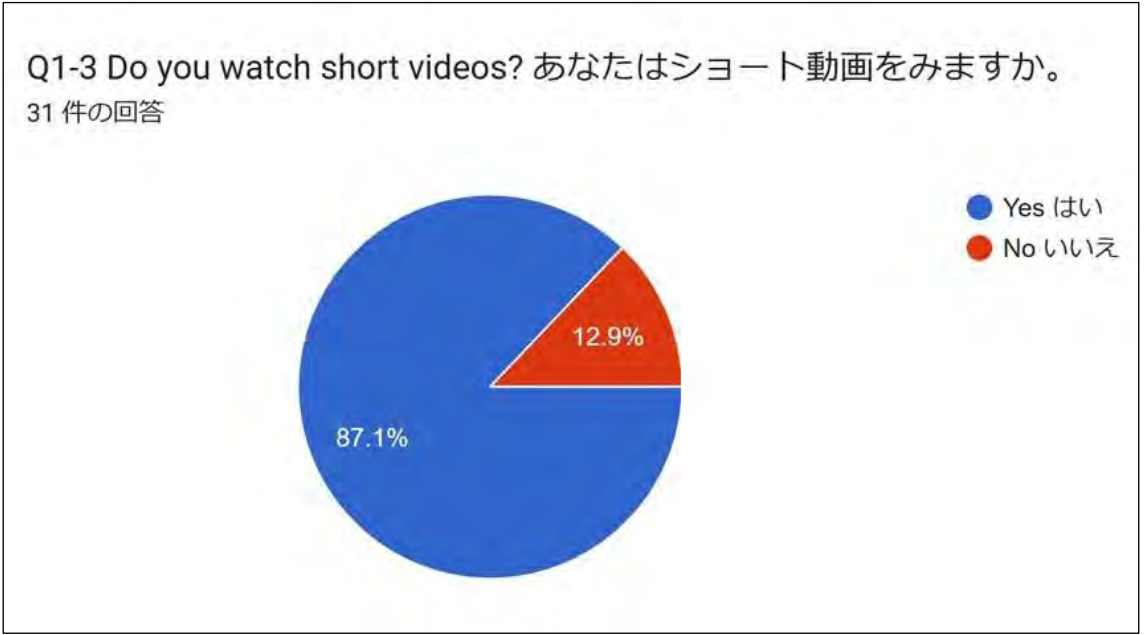


図9 留学生のなかでのショート動画の利用状況

第1章のとおり、2023年1月実施の産学共創フィールドスタディにおける学生たちの発表では、SNSと連動したショート動画の有効性が強調された。第2章で扱ったように、テネシー大学の参加学生のアンケートのなかで、アメリカから姫路に来る旅行者を増やすためにはどのような努力をしたら良いかを質問した質問項目(4)の自由記述回答でも、ソーシャル・メディアの挙げた回答が2件あった(4-fと4-j)。

そこで交換留学生を対象としたアンケートのなかで、ショート動画の視聴の有無についても質問をしたところ、図9のように、約9割がショート動画を観ると回答した。引き続き

図 10 は、具体的にどのメディアプラットフォームを介してショート動画を観ているかについての質問とその回答である（複数回答が可能なかたちで質問）。

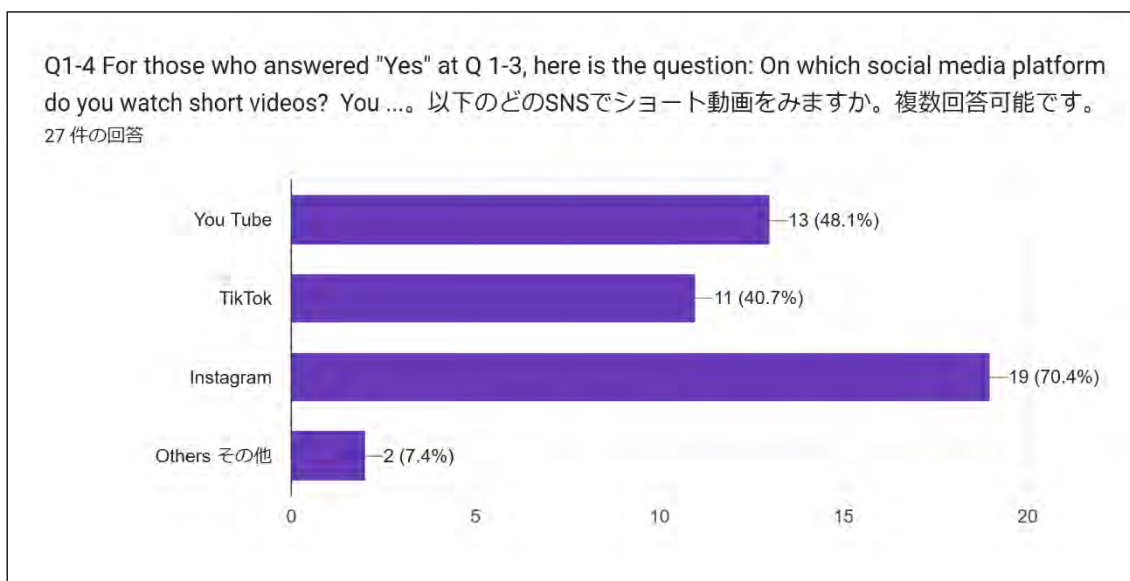


図 10 留学生のなかでのメディアプラットフォームの利用状況

図 10 のように、その他の回答はわずかにとどまり、大半は事前の予測のとおり、**You Tube**、**Tik Tok**、**Instagram** に集中する結果となった。なかでも、相対的に **Instagram** の利用の高さがうかがわれた。

こうした回答の傾向は、もちろん目新しいものでは特段ない。そうではあるが、国内外を問わずより若い世代に姫路市を知ってもらうための手法として、各種メディアプラットフォームにおけるショート動画の活用は、あらためて検討して良いと言える。

つぎに考察を加えたいのは、留学生による姫路ショートトリップの参加者の満足や不便についてである。留学生とチューターが参加したショートトリップでは、満足と不満足ないしは不便さを、より具体的な文脈で考察するために、参加者が姫路城周辺で昼食をとった飲食店をめぐる満足の度合いで測ることを試みた。

図 11 のように、アンケートに回答した約 8 割（79%）の留学生が姫路城周辺の飲食店で昼食に満足ないしは非常に満足と回答した。明らかな回答間違いを除けば、不満と答えた者は 1 割に満たなかった。こうした姫路にたいする肯定的な評価は、質問の観点は異なるとはいえ、第 2 章であつかったテネシー大学の参加学生たちの評価とも一致している。

そのうえで、留学生たちによる飲食店にたいするこうした肯定的な評価を受けとめつつも、この評価の背後に、実際には感じたかもしれない不便さがどのようなかたちで潜在的に存在しているのか否かを検討することは、国際的な誘客の促進という点からは、やはり必要なことであると思われる。そこで、このたびの第 2 回モニターツアーにかんしては、留学生たちに帯同し、昼食時に留学生たちと小グループに分散して、ともに飲食店に入ったチュー

ターの学生たちに、別個にアンケートを実施した。

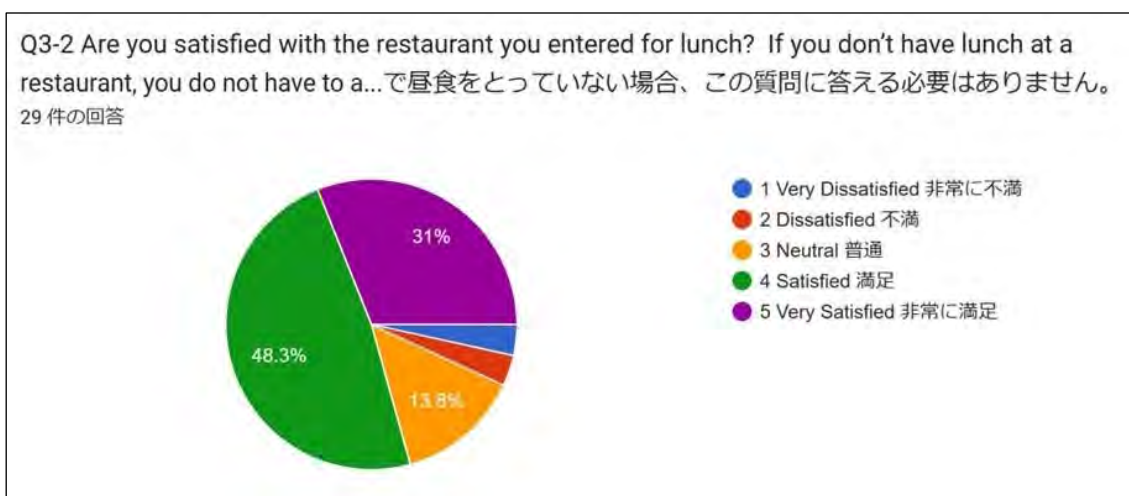


図 11 留学生の姫路城周辺の飲食店での食事にたいする満足の度合

チューターへの質問は、留学生と一緒にいった飲食店の名前、一緒に行動した留学生の国籍とあわせて、留学生とお店に入ってお昼を食べた際に、外国人旅行者にたいするお店の対応という点で、良いと思った点、あるいは改善が必要と感じられた点などについて自由記述で回答を求めるといった形式をとった。具体的な飲食店の名前はここでは記載しないが、留学生とチューターたちは、姫路城周辺の7つの飲食店で昼食をとったことがわかった、チューターたちによる自由記述の回答は、下記のとおりである。

①飲食店の名前を教えてください。

【飲食店A】

留学生とお店に入ってお昼を食べた際、外国人旅行者にたいするお店の対応という点で、良いと思った点、あるいは改善が必要と感じられた点など、なにか気づいたことがあれば自由に書いてください。

■メニューが英語で良い。会計に手こずる。(フランス、ベルギー、ドイツ)

■英語のメニューがありました。(フランス、ベルギー、ドイツ)

■白髪のおばあさんの態度が **aggressive** で、留学生がちょっとビビっていた。旅行者用の値段設定で、少し高く感じた。味が少し薄いと言っていた。(フランス、ドイツ、ベルギー)

②留学生と一緒にいった飲食店の名前を教えてください。

【飲食店B】

留学生とお店に入ってお昼を食べた際、外国人旅行者にたいするお店の対応という点で、良

いと思った点、あるいは改善が必要と感じられた点など、なにか気づいたことがあれば自由に書いてください。

■メニューが全部日本語だったので、留学生は読めなくて困っていました。(スペイン)

③留学生と一緒にいった飲食店の名前を教えてください。

【飲食店C】

留学生とお店に入ってお昼を食べた際、外国人旅行者にたいするお店の対応という点で、良いと思った点、あるいは改善が必要と感じられた点など、なにか気づいたことがあれば自由に書いてください。

■全員日本語が話せたので特に困ったことはありませんでした。(イタリア、韓国、ドイツ)

■とても美味しかったです。英語のメニューを用意してほしい。(イタリア、韓国)

④留学生と一緒にいった飲食店の名前を教えてください。

【飲食店D】

留学生とお店に入ってお昼を食べた際、外国人旅行者にたいするお店の対応という点で、良いと思った点、あるいは改善が必要と感じられた点など、なにか気づいたことがあれば自由に書いてください。

■英語のメニューを渡してくれた、レンゲを渡してくれた、にこにこしてくれた。(ベルギー、フランス)

⑤留学生と一緒にいった飲食店の名前を教えてください。

【飲食店E】

留学生とお店に入ってお昼を食べた際、外国人旅行者にたいするお店の対応という点で、良いと思った点、あるいは改善が必要と感じられた点など、なにか気づいたことがあれば自由に書いてください。

■ベジタリアンに対応しているかどうかの表示がなかったため、メニューを決めるのに少し苦労したのもっと表示があればいいなと思いました。(韓国、ベトナム、イタリア、ドイツ)

■ヴィーガンが食べられるメニューがあるか店員さんは知らなかった。英語のメニューがなかった。(韓国、ベトナム、ドイツ、イタリア)

⑥留学生と一緒にいった飲食店の名前を教えてください。

【飲食店F】

留学生とお店に入ってお昼を食べた際、外国人旅行者にたいするお店の対応という点で、良

いと思った点、あるいは改善が必要と感じられた点など、なにか気づいたことがあれば自由に書いてください。

■使っている材料の英語での記載があれば、ビーガンやアレルギーに対応できるかと思いました。(韓国、アメリカ)

⑦留学生と一緒にいった飲食店の名前を教えてください。

【飲食店 G】

留学生とお店に入ってお昼を食べた際、外国人旅行者にたいするお店の対応という点で、良いと思った点、あるいは改善が必要と感じられた点など、なにか気づいたことがあれば自由に書いてください。

■店員の方がベジタリアンやビーガンに理解のある方で、対応してくれたことがよかった。また英語も丁寧に使っていていいと思った。(スイス、ドイツ、フランス)

チューターにたいするアンケート結果を踏まえた具体的な考察は次節でおこなうが、以上のように、留学生たちの高い満足の意識と並行して、実際の昼食の現場ではそれなりの不便さを留学生たちが感じた局面があったことが、チューターを対象としたアンケートの自由記述からうかがえる結果となった。このように、留学生たちに実施した満足の尺度をはかるアンケートとチューターたちに実施した自由記述に基づくアンケートを組み合わせることで、留学生たちが姫路城周辺の飲食店で体験したことを、より立体的に把握することができると言える。

第3節 姫路ショートトリップの考察

次節の分析のなかでも、とくに留学生たちに実施した満足度のアンケートと、チューターたちに実施した自由記述に基づくアンケートとを踏まえて、本節では具体的に4点、第2回モニターツアーとしての姫路ショートトリップから、国際的な誘客の促進という主題と関連して考察し得ることをみていきたい。

第一に、留学生たちはアンケート上でその大多数が満足と回答しており、その肯定的な評価は率直に受けとめて差し支えないと思われる一方で、飲食店での実際の食事では、さまざまな不具合を感じていた可能性があることが、チューターの学生たちに別個に実施したアンケートをつうじて垣間見える結果となった。すなわち留学生たちは、否定的な経験よりも肯定的な経験を優先して意見表明したことが推測される。

このように推測される意見表明のあり方は、第2章で考察したアメリカのテネシー大学の学生たちの傾向と、類似していると結論づけることは十分に可能であると考えられる。もし、そのように結論づけることが可能であるとすれば、否定的な意見を直截に表明することを避ける傾向は、留学生の出身国に依らないとさらに結論づけることがおそらく可能かもしれない。

もちろんこうしたさらなる結論は、慎重に取り扱う必要がある。というのも、本章が対象としているのは、異文化理解にたいして関心と知識をあらかじめ有している交換留学生たちという、バイアスをあらかじめ帯びた集団である。それゆえに、この集団の考察から引き出せることを、即座に一般化することはできないと言わざるを得ない。ただ、すくなくとも異文化理解にたいして関心と知識を有している場合、特定の国や文化にとらわれない傾向の近似化が生じるという仮説を立てることは可能だろう。

姫路ショートトリップの考察に戻れば、第二に指摘できることは、ひとつの飲食店にたいして、肯定的な回答と批判的な回答が混在している場合があるということである。これは、チューターに施したアンケートのなかで、飲食店Cについての記述からうかがえる。ある留学生たちと飲食店Cに入ったチューターは、一緒に行動した留学生の日本語の運用能力のおかげで、とくに不便さを感じなかったことを報告している一方で、別の留学生たちと飲食店Cに入ったチューターは、英語のメニューがなかったことに難儀したことを回答している。

自明なことであるかもしれないとはいえ、日本語の運用能力に代表される留学生の側の条件によって、飲食店にたいする評価は大きく変わってくる。このたびのアンケートからは飲食店と入店した旅行者との相互作用のなかで、当該の飲食店の評価は変化するということがあらためて確認できた。これは満足度から何が読み取れるのか、あるいは読みとるべきなのかという点を考えるうえで、あらためて示唆的である。

第三に、これもきわめて頻繁に指摘されることであり、ある意味で凡庸なことではあるものの、英語のメニューの有無については、評価点として重要であるということである。チューターのアンケートでは、英語メニューがある場合に肯定的な回答が生じ、ない場合には批判的な回答が生じている。これもごく当然の結論ではあるが、とはいえ重要なことは、多くの外国人旅行者が訪れる姫路城周辺の飲食店においても、英語のメニュー対応という基本的な条件は、必ずしもまだ一律に整っているわけではないということである。

もちろんこれは、飲食店それぞれによって考え方の違いがあり、英語のメニューの有無をめぐって拙速な判断をすることは避けるべきだろう。そうではあるが、国際的な誘客の促進という観点からは、英語メニューの整備といった基本的な部分を着実に積み上げていくことがやはり大切であることもまた事実である。

第四として、これは英語メニューの有無とかなりのところまで連動するが、ベジタリアンやヴィーガンへの対応の有無も、重要な評価点であることがうかがえる。これもまた、飲食店それぞれによって考え方の違いがあり、英語メニューとは異なり、飲食店によっては調理上の制約や業態等との関連もあり、対応がどうにも難しい場合も十分に考えられる。

そのうえで、チューターを対象としたアンケートからも見てとれるように、ベジタリアンやヴィーガンの対応を求める人びとは、確実に存在している。こうした人びとへの対応を前向きに考えていくことは、飲食店Gにたいするチューターの記述からもうかがえるとおり、旅行者とりわけ外国人旅行者にたいして深い満足とかけがえのない思い出をもたらすこと

が予想されるところでもある。個々の飲食店では対応が難しい問題でもあり、地域の飲食業組合や行政を含めた包括的な取組みが求められるかもしれない。

結論

本調査は第 1 章冒頭に記したように、神戸大学国際人間科学部ならびに大学院国際文化学研究科に交換留学生あるいは短期交流学生として在籍する外国籍学生を姫路市に引率するモニターツアーを実施し、アンケートや行動観察をつうじて、国際誘客に関する基礎的データの取得を試みた。こうした試みによって、国内外プロモーションの充実と外国人旅行者の誘客について実践的な知見を得ることを目的とした。

合計して 2 回実施したモニターツアーの考察については、これまでの各章ですでに述べたとおりであり、実践的な知見についても考察のなかで提起した。そこで、各章を総合しての本章の結論としては、以下、2 点について述べておきたい。

まず、外国人旅行者、とくに若い世代の外国人旅行者が、どのような手段や回路をつうじて日本についての情報を入手しているのかについては、SNS 利用の実態等に根ざして把握する必要がある。第 2 章のテネシー大学との国際共修プログラムの考察のなかで言及したように、日本語が話せないということは現在、日本について知らないということの意味がない。英語の母語話者であるテネシー大学の参加学生たちは、日本語の運用能力がほぼなくとも、日本のポップカルチャーにかんする英語でのプレゼンテーションの準備を支障なくおこなうことができていた。これほどまでに今日、英語のみで構築された日本のカルチャーについての蓄積が存在している。テネシー大学の学生に限らず、若い世代の外国人旅行者はこうした蓄積をもとに日本を理解していると言って良い。

こうした蓄積の大半はネット上に存在しており、その日々の更新は SNS を含めたメディアプラットフォームを介してなされているのが実際である。若い世代の外国人旅行者を中心に、日本の観光に関する情報の取得がこれらのプラットフォームをつうじてなされていることはもちろん今や自明のことであるかもしれないが、本調査はそのことをあらためて確認した。

つぎに、外国人旅行者がアンケートで回答するポジティブなフィードバックの背後にあるかもしれない潜在的なネガティブな経験については、日本側の同行者にたいする並行的な調査をつうじて補う必要がある場合によってはあるということである。第 2 章で触れなかったエピソードがある。テネシー大学のある参加学生は、昼食時に姫路城付近のある飲食店に入った際にひどく不機嫌になり、結局、別の飲食店に入りなおしたという。その学生はユダヤ教徒であり、最初に入った飲食店の日替わり定食が豚しゃぶ定食だったため、宗教的にそれを注文して食べることはできなかったのである。その学生が午後もしばらく不機嫌だったことを、後日、日本側の参加学生から聞かされた。しかし、第 2 章でみたように、そのことは公式のアンケートのなかにはまったく書かれておらず、日本側の参加学生による口頭での報告がなければ知り得なかったことである。

もちろんアメリカ人のその学生は、そのことをもって最初に入った飲食店に悪い感情をひきずることはなかったかもしれない。それによって姫路の印象が悪くなることもなかつ

たかもしれない。ただ、姫路の思い出のなかにネガティブな記憶が残っただろうことは推測でき、それが姫路の来訪経験の質を左右するものであることも容易に想像できるところである。

以上は一見してささいなエピソードに見えるかもしれない。だが、このエピソードは、アメリカ人旅行者のなかにはユダヤ系の者が一定数おり、その者たちはイスラム教徒と同様に飲食において宗教上の禁忌があることをおしえてくれるものである。おそらく、そうした可能性を意識できる飲食店は姫路に限らず多くないはずである。いずれにしてもこのエピソードは、ポジティブなフィードバックの背後にあるかもしれない潜在的なネガティブな経験をどのように可視化するかという課題のもつ意義を、あらためて明るみに出していると言える。

留学生・短期交流学生のモニターツアーに 基づく国際誘客の基礎調査

2024年3月28日
神戸大学Promis地域連携センター
(国際誘客研究グループ)
井上 弘貴

これまでの
姫路市と神
戸大学国際
文化学研究
科ならびに
Promis地域
連携センタ
ーの取組み
①

https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2023_02_13_01.html

姫路で産学共創フィールドスタディを開催しました

2023年02月13日

国際文化学研究推進インスティテュート（Promis）地域連携センターと国際人間科学部グローバル文化学科が共同で企画し、1月28日に姫路市で「産学共創フィールドスタディ」を行いました。昨年1月に京都府南丹市美山町で行われたセミナーに続いて企画された今回のフィールドスタディには、国際文化学研究科（国際人間科学部）、地域連携推進本部、SDGs推進本部の教職員と学生約30名が参加するとともに、神姫バス株式会社ならびに地元姫路のDMOである公益社団法人姫路観光コンベンションビューローから8名の関係者の皆様にご参加いただきました。当日は、ビューローの職員の方の先導のもと、荘原などの銘菓が揃うピオレ姫路おみやげ館や小磯良平の原画が並ぶホテルモントレ姫路などの姫路駅前施設や商店街のまち歩きをしました。



午後からは姫路市市民会館に場所を移し、日本の内外の若者に姫路の魅力アピールするための情報発信についての提案を中心に、姫路の観光振興について学生たちがプレゼンを行い、神姫バスの社員の方々やビューローの方々や質疑や意見交換を行いました。また、本学卒業生でもある神姫バス社員の方には、神姫バスの地域づくりの取り組みについて、ミニレクチャーをいただきました。国際文化学研究科は3月に姫路市と地域連携協定（部局協定）を締結するだけでなく、海外協定校からの

留学生を交えた教育研究活動の可能性を神姫バスと引き続き検討するなど、今後も観光まちづくりを主題とした異分野共創の研究教育や社会実装を展開していく予定です。

これまでの姫路市
と神戸大学国際
文化科学研究科なら
びにPromis地域連
携センターの取組
み②

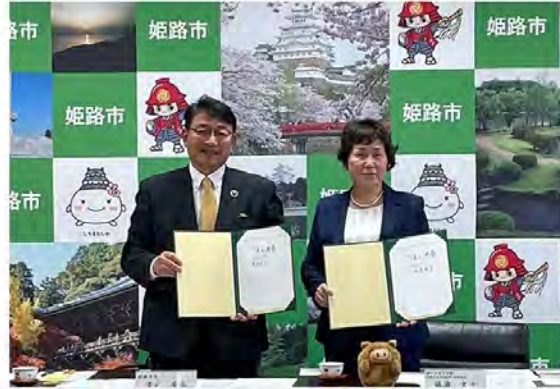
https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2023_03_28_01.html

神戸大学大学院国際文化科学研究科が姫路市と地域連携協定を締結

2023年03月28日

神戸大学大学院国際文化科学研究科は2023年3月22日、姫路市と地域連携に関する協定（部局協定）を結び、姫路市役所で協定締結式を行いました。同研究科が兵庫県内自治体と連携協定を締結するのは南あわじ市に次いで2カ所目、神戸大学が中・播磨地域の自治体と連携協定を結ぶのは初めてとなります。

国際文化科学研究科では2022年4月に地域連携センターを設置し、地域での教育、研究活動や貢献事業に取り組んでいます。その一環として、昨年秋ごろから井上弘貴教授、幸島理人准教授を中心に、姫路市内で観光まちづくりをテーマに研究、教育活動を進めています。昨年10月末には、ドイツや中国などの留学生ら約60人が参加して「姫路ショートトリップ」を実施し、世界遺産・国宝姫路城や書写山行教寺を見学するなど日本の歴史、文化を学びました。また、今年1月末には、神姫バス、姫路観光コンベンションビューローとともに「姫学共創フィールドスタディ」を実施し、姫路市中心部を巡って、地域の歴史文化を学ぶとともにインバウンド観光の課題などを探りました。



本研究は、弊学国際人間科学部ならびに大学院国際文化科学研究科に交換留学生あるいは短期交流学生として在籍している外国籍学生を姫路市に引率するモニターツアーを実施し、ツアー前後のアンケートやインタビュー調査をつうじて、国際誘客に関する基礎的データの取得を試みる。こうした試みによって、国内外プロモーションの充実と外国人観光客の誘致について実践的な知見を得ることを目的とした。

本年度、2回のモニターツアー（ショート・トリップ）を実施。第1回は5月27日（土）。5月20日から6月1日にかけて、米国テネシー州のテネシー大学ノックスヴィル校から、弊学においてサマープログラムを実施する米国人学生14名、引率教員1名、大学院生の引率補助者1名が来学した。弊学側では、学部におけるGSP（グローバル・スタディーズ・プログラム）の実践型国内研修として参加を募った学部学生14名が参加（2名が当日は欠席）。午前中に姫路城を訪れ、グループに分かれての昼食後、午後は書写山を訪れた。

第2回は、10月14日（土）実施。弊学に半期あるいは1年の期間で在籍する交換留学生と、その交換留学生たちをサポートする学生チューターを対象としたショートトリップの形態をとってモニターツアーを実施。留学生44名、学生チューター22名の計66名が参加した。旅程は5月の催行と同じ。

テネシー大学と国際共修プログラムを実施しました

2023年06月12日

国際人間科学部ならびに国際文化学研究科では5月20日から6月1日、神戸大学と大学間協定を締結しているテネシー大学ノックスヴィル校の学生たちを迎え、国際共修プログラムを実施しました。この国際共修プログラムは、テネシー大学の堀口典子准教授が企画した同大学のサマープログラムとの共同催行のかたちで、国際人間科学部のGSP実践型「テネシー大学の学生と国際共修で学ぶ：Tennessee Friendship Program」としておこなわれました。

このたびの国際共修プログラムでは、20日初日のウェルカム・ミーティングに続き、小グループにわかれての三宮でのまち歩きにより交流を深めたあと、テネシー大学の14名の学生と国際人間科学部の14名の学生がペアを組み、「日本のポップカルチャー」を共通テーマとして、英語でプレゼンテーションをするための共同作業を期間中におこない、5月31日と6月1日の2日にかけて発表会をおこないました。6月1日の最終日には、テネシー大学のクリスタ・ウィーガンド教授が引率し、法学部を訪れた11名の別のテネシー大学の学生たちも合流参加しました。



期間中、テネシー大学の学生たちは堀口准教授の引率のもと、京都、大阪、姫路、奈良などを訪れました。姫路については5月27日、国際文化学研究科のPromis地域連携センターの協力のもと、神戸大学側の学生もプログラムの一環として参加し、姫路城や書写山園教寺をともに訪れ、日本の文化がアメリカ人の学生たちにどのように受けとめられているのかを実地で体験する機会となりました。

テネシー大学との共同プログラムは2019年に試行したあと、新型コロナウイルスの世界的な拡大のなかで中断を余儀なくされていました。このたびのプログラム再開をきっかけとして、国際人間科学部ならびに国際文化学研究科では、学内外との連携をはかりつつ、研究と教育のさまざまな場面でテネシー大学との交流を今後とも強化していく予定です。

https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2023_06_12_01.html

テネシー大学の学生たちと神戸大学の学生たちとの国際共修の様子



テネシー大学の学生と神戸大学の学生がペアを組み、日本のポップカルチャーについて英語で発表をした(左)。また、教室でグループになり、日米の文化の違いについて議論をした(右)。

2023年5月27日(土) 米国テネシー大学の学生を
引率しての第1回モニターツアーを実施



アンケートだけでなく、エスノグラフィー(行動観察)に立脚したモニターツアーの観察

テネシー大学の学生にたいして記述式の参加者アンケートを実施した(神戸大学の学生にはアンケートを実施せず)。14名のうち13名が回答。

回答の一例

UT Kobe Summer Program 2023
Survey for short trip at Himeji

Please answer the following questionnaire. Thank you for your cooperation!

◆What kind of impression did you have about Himeji?

I LOVE HIMEJI! As an overseas traveler, I was able to experience it in person. It was very interesting to learn about all the defense mechanisms that they have too.

姫路が好きです!

姫路についてどのような印象をもちましたか?

姫路城を訪れた際、海外からの旅行者としてなにか不便を感じましたか?

◆When visiting Himeji Castle, did you experience any inconveniences as an overseas traveler?

Not really. The only thing was the steep stairs, they were very hard to climb up on.

そういうことはなかったです。ひとつだけ、階段がきつかったです。上るのがとてもきつかったです。

アンケート及びエスノグラフィー(行動観察)から 浮かび上がった点

- テネシー大学の学生たちは、時には快適ではない経験もしたがそれはアンケート等にははっきりとは書かれなかった。
⇒「ネガティブなメッセージをポジティブなメッセージで包み込むように訓練されている」(エリン・メイヤー『異文化理解力』英治出版2015年)アメリカ人の文化的傾向性なのか？
- テネシー大学の学生たちの日本語の運用能力と日本についての知識とのあいだには非常に大きなギャップがあった。
(日本語が話せない≠日本について知らない)
⇒英語で流通している日本についての膨大な情報
- アメリカ側の引率教員(50代日本国籍女性)は引率時にさまざまなリスクを感じていた。

2023年10月14日(土) 交換留学生を引率しての 第2回モニターツアーを実施



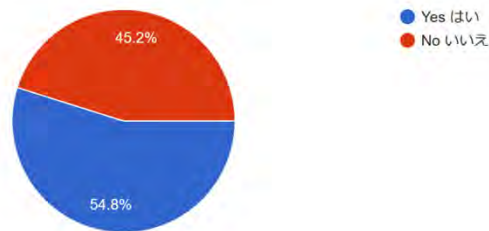
11か国、31名の留学生からアンケートを回収(回答率70%)

参加した留学生のなかでの姫路の事前の知名度は5割をわずかに上回った。

Q2-1 Did you have prior knowledge of Himeji before your visit to Japan?

あなたは日本に来る前に姫路を知っていましたか。

31件の回答

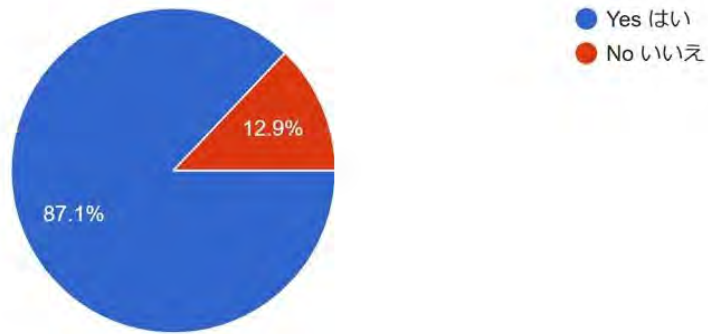


それなりの認知度とも言えるが、日本にあらかじめ関心のある留学生たちであることに鑑みれば、認知度向上の余地はさらにあると言える。

姫路を知ったきっかけはネットが多いものの、多様性が確認できる。

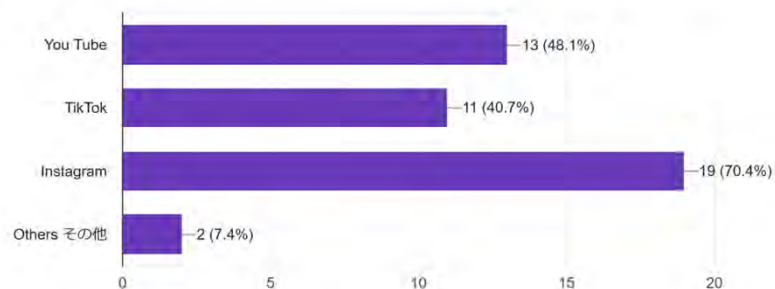
- Tiktok
- James Bond の映画
- フランスの日本の文化の授業に姫路城のことを聞いた
- 旅行
- 初めての留学で見に行きました。
- From documentaries and before visiting Japan I did some research of what sights I would like to see
- ネットで読みました。何年か前ですからどこで読んだのかはもう覚えていません。
- Internet
- I like history so found out about the castle.
- 関西、また兵庫を調べた時には、姫路についても知るようになり、歴史が詳しい友人からも姫路城についても聞いたことがあります。
- 友達が日本に旅行した時姫路城を勧めました
- Heard of it via youtube videos on japanese culture and it's a famous place. I also wanted to visit famous landmarks in Japan, and searching for it on internet Himeji came pretty often.
- Online tourist guides
- at University
- general knowledge, my research
- From general knowledge and school

Q1-3 Do you watch short videos? あなたはショート動画をみますか。
31件の回答



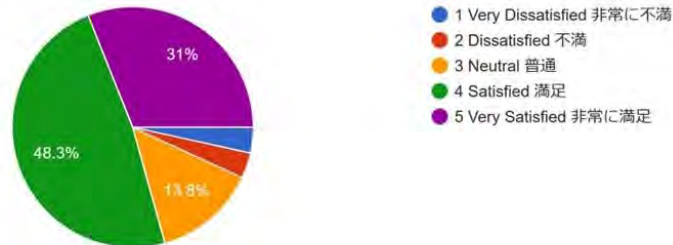
留学生の情報の入手先としてのSNSと、
その利用形態についての分析の必要性

Q1-4 For those who answered "Yes" at Q 1-3, here is the question: On which social media platform do you watch short videos? You ...。以下のどのSNSでショート動画をみますか。複数回答可能です。
27件の回答



三大メディアとしてのYou Tube、Tik Tok、Instagram

Q3-2 Are you satisfied with the restaurant you entered for lunch? If you don't have lunch at a restaurant, you do not have to a...で昼食をとっていない場合、この質問に答える必要はありません。
29件の回答



アンケートに回答した約8割(79%)の留学生が姫路城周辺の飲食店での昼食に満足ないしは非常に満足と回答した。明らかな回答間違いを除けば、不満と答えた者は1割に満たなかった。

11名のチューターが回答。7飲食店について自由回答

- ・【A店】メニューが英語で良い。会計に手こずる。
- ・【A店】英語のメニューがありました。
- ・【A店】白髪のおばあさんの態度がaggressiveで、留学生がちよっとビビっていた。観光客用の値段設定で、少し高く感じた。おでんの味が少し薄いと言っていた。
- ・【B店】メニューが全部日本語だったので、留学生は読めなくて困っていました。
- ・【C店】全員日本語が話せたので特に困ったことはありませんでした。
- ・【C店】とても美味しかったです。英語のメニューを用意してほしい。
- ・【D店】英語のメニューを渡してくれた。レンジを渡してくれた。にこにこしてくれた。
- ・【E店】ベジタリアンに対応しているかどうかの表示がなかったため、メニューを決めるのに少し苦労したのもっと表示があればいいなと思いました。
- ・【E店】ヴィーガンが食べられるメニューがあるか店員さんは知らなかった。英語のメニューがなかった。
- ・【F店】使っている材料の英語での記載があれば、ビーガンやアレルギーに対応できるかと思いました。
- ・【G店】店員の方がベジタリアンやビーガンに理解のある方で、対応してくれたことがよかった。また英語も丁寧に使っていていいと思った。

- アンケート上では満足と回答した留学生たちが、飲食店での実際の食事では、不具合を感じていたことが、日本側のチューター学生たちに別個に実施したアンケートをつうじてうかがえる。
- ⇒この回答の傾向は留学生の出身国に依らないことが確認された。
- ひとつの飲食店にたいして、肯定的な回答と批判的な回答が混在している場合がある。
- 英語のメニューの有無については、評価点として重要であることがわかる。英語メニューがある場合に肯定的な回答が生じ、ない場合には批判的な回答が生じている。
- ベジタリアンやヴィーガンへの対応の有無も、重要な評価点であることがうかがえる。

モニターツアーをつうじて効果的な フィードバックを得るには

- 外国人旅行者がアンケートで回答するポジティブなフィードバックの背後にあるかもしれない潜在的なネガティブな経験については、日本側の同行者にたいする並行的な調査をつうじて補う必要が場合によってはある。
- 外国人旅行者、とくに若い世代の外国人旅行者が、どのような手段や回路をつうじて日本についての情報を入手しているのかについては、SNS利用の実態等に根ざして把握する必要がある。